

世界が平和になるよう願いを込めて ～小・中学生平和作文コンクール入賞作品発表～

市では、子どもたちの平和に対する思いや考えを発表する「小・中学生平和作文コンクール」を実施しています。今回は、市内の小・中学生から138作品の応募があり、審査の結果、最優秀賞には小学生の部で長岡小学校5年太田美希さんの「ヒロシマを訪れて」が、中学生の部では古川東中学校2年栗生恭輔さんの「平和について考えたこと」が選ばれました。そこで今回は、最優秀賞に輝いた2つの作品を紹介します。

◎政策課 ☎23-2129

小学生の部【最優秀賞】

ヒロシマを訪れて

長岡小学校5年

太田 美希さん

八月四日、私は広島を訪れた。「ピースアクション・イン・ヒロシマ」に親子で参加するためである。

初めて訪れた広島は、思っていたよりも暑くなく、大都会だった。テレビなどで知っている六十二年前のヒロシマとは、ちよっとだけ遠い場所のような感じがした。

私がヒロシマに行ってみると思ったのは、小学校三年生の時。「つるのつて」という本を読み、そのモデルとなった佐々木貞子さんや原爆に興味を持ったことがきっかけだった。

「原爆ドームを見てみたいな。」

広島では、原爆ドームや平和資料館、爆心地に近かった袋町小や本川小平和資料館、折り鶴を保管している旧日銀など、いろいろなところを見て回った。実際の原爆ドームは、目をおおいたくなるようなこわれ方をしていて、私の戦争に対する考えが甘かったと思わされるようなものだった。

私が特に戦争の怖さを感じたところは、本川小平和資料館と原爆死没者追悼平和祈念館だった。

平和資料館には、焼けてボロボロになった銃や焼け溶けたガラスや瓦があつて、とても驚いた。平和祈念館では、原爆を落とされた直後のヒロシマの様子が再現されていて、背すじがピンとなるような緊張感があつた。

また、ここでは被爆の体験記を見ることができた。私が見た体験記には、

「助けて！助けて！」と助けを呼ぶ声が聞こえても、助けられなかった。」

と書いてあつた。私は、助けられなかつた方もかわいそうだけど、助けてあげられなかつたことを今でも悔やみ、自分を責めている方のことも、とても気の毒に思つた。今回、被爆した方のお話も直に聞くことができた。被爆者の瀬木さんは、「今でも（原爆の）爆音が聞こえている。」と話していた。背中にガラス

の破片がささつた兄弟の話や、父親をさがしに行った時、川に死体があふれていた話など、本当は思い出したくないだろうことを、瀬木さんは一生けん命話してくれた。

広島は大都会に復興した。でも、広島の人々は、六十二年前の戦争や原爆投下の悲しみや怒りを忘れてはいない。戦争や原爆で苦しんでいる人は、戦後六十二年の今もいる。原爆の爆風でできたケロイドのせいで差別されたり、放射能のせいで病気になる人々もたくさんいるそうだ。

私は、このようなことが二度と起きないように、戦争や原爆の怖さ、おろかさを考えていきたい。そして、私たち一人一人ができること―いじめや差別のない学校や社会をつくろうと努力していくこと―が、平和へ近づく第一歩なのではないかと考え始めている。



長岡小学校5年 太田 美希さん

優秀賞受賞者

小学生の部

古川第一小学校6年	二階堂 真実さん	みんなで美しい空を見つめたい
古川第三小学校6年	横田 洋樹さん	野球のできる平和
古川第三小学校5年	白鳥 友万さん	原爆を知って考えたこと
長岡小学校6年	玉川 里奈さん	伝えたい事

中学生の部

古川東中学校1年	須貝 ひかるさん	戦争と平和
----------	----------	-------

中学生の部【最優秀賞】

平和について考えたこと

古川東中学校2年

栗生 恭輔さん

僕がこの作文を書くことになったきっかけは、八月十五日の新聞に太平洋戦争のことが書いてあつたからです。その新聞には終戦を迎えた時のことが書いてありましたが、僕は太平洋戦争自体よくわからないので、本で調べてみました。すると、太平洋戦争とは日本とアメリカが三年八か月の間戦争したことだとわかりました。日本は空襲や原爆などで大きな被害を受けましたが、戦争の恐ろしさはそれだけではありません。

では想像できません。しかし戦時中の東南アジアではどの戦地へ行つてもこのような光景があつたのです。

また、硫黄島では二万人の兵が玉砕しました。爆弾をかかえて敵の戦車に体当たりして自分も敵も死ぬのです。僕は映画「硫黄島からの手紙」を見たことがありますがとても悲惨なものです。最初から戦えば全員死ぬとほぼ確定しているのにただひたすら応戦したのです。負け戦で自爆しなければいけない兵の気持ちは苦痛すぎて想像できません。その兵だつて自分の家に帰れば

家族がいて、自分の暮らしがあるのです。人を紙くずと同じように使う戦争はあつてはならないことです。戦争は誰も幸福にはしません。しかし、実際に身をもって体験しないとわからないものが戦争というもののなのです。

戦争でつらい思いをしたのは海外に出征した兵だけではありません。終戦まぎわには特攻隊と呼ばれる人々も登場します。特攻隊とは、太平洋戦争末期に敵の軍艦を破壊するため飛行機に爆弾をつんで体当たりするという作戦です。飛行機に乗った人は必ず死ぬので百死零生の攻撃とも呼ばれたそうです。この作戦にはアメリカもすごく怖がつたそうです。僕は考えただけでもすごく恐いです。神様から授かった生命を自爆という形で破壊するのは非常に悲しいことだと思います。今の



古川東中学校2年 栗生 恭輔さん

世界では考えられません。一般の民間人も空腹と空襲で大変過酷な生活を強いられていたようです。東京などの小学生は空襲がくると危険ということで疎開しましたが苦しい生活をしていました。戦争に反対した人は非国民と言われて警察に捕まりました。広島と長崎に原爆が落とされて多くの人が死に、今も後遺症で苦しんでいる人がたくさんいます。中国でソ連（現ロシア）の人達に捕らえられてソ連に連れて行かれ、戦争が終わった後も重労働をさせられて死んだ人もいます。すべて戦争がもたらした被害です。

しかし、太平洋戦争後も各地で戦争がおきています。一九五〇年には朝鮮戦争、一九六四年にはベトナム戦争、そして二〇〇三年のイラク戦争など戦争や紛争が後を断ちません。

第三次世界大戦がおければ地球は壊れると言われています。なぜなら第三次世界大戦は原爆を使った戦争になるからです。どの国も敵に原爆を落とす合つたら大変なことになるでしょう。世界のたくさんの都市が広島や長崎のようになり、世界は破滅します。一度にたくさん原爆を落としたりなんてしたらそれこそ大変でしょう。だから日本は

世界でただ一つの被爆国として核廃絶を呼びかけなければいけないのです。原爆をこの世からなくす使命が日本にはあるのだらうと思います。

そして、戦争のない世界を作らなければいけません。さつきも言ったように、戦争は誰も幸福にはしません。人が人が殺し合いをしたって何の得にもならないと僕は思います。仮にどこかの国が戦争に勝つて領地や金を手に入れたとしても、それには必ず犠牲となつた人がいるはずで、一部の人がだけ幸せになるのは幸福だとは思いません。みんなが幸せになつて初めて幸福になるのだと思えます。だって一人が幸せな思いをしなくても一人が不幸な思いをするなんて不公平だと思つてからです。

戦争は人の心を貧しくするだけだと思えます。人は元々弱い生き物なのだから、みんな力を合わせて生きていかなければいけないし、せつかく考えることができるんだから、戦争をして勝つことではなく、みんなが平和に暮らせることを考えてほしいです。そうすれば、戦争はなくなると思えます。太平洋戦争のような悲劇を繰り返さないためにも今こそ改めて考える時だと思えます。